

# 新世紀, アジアの課題

新しい千年紀を目前にして、歴史が動いているという実感がある。「奇跡」の成長を遂げた東アジアは1997年7月以降、未曾有(みぞう)の通貨・経済危機に転落した。他方、80年代後半に衰退が不可避と思われた米国は再び時代を謳歌(おうか)している。急激な情報技術の発達で、世界の経済、社会を激変させている。

さて、危機に陥った東アジアは概して2000年を待たずに再生に向けて動き始めたようにみえるが、奇跡の成長も通貨・経済危機も、考えてみると、国境を越えた資本や技術、人や情報の流れが激増したことと深く関係しているように思う。日本の経済もこの間、東アジアとの関係を深め、統合化の傾向がみえる。国境の壁は確かに低くなった。ところが、経済のグローバル化は、金融面での不安定性をかつてなく高めた。それに対処するために、欧州諸国は「ユーロ」で対抗し、中南米諸国は「ドル化」で対処しようとしている。

アジアは、どうするのか。製造業を中心に輸出を通じて発展する東アジアにとって「ドル化」の選択は、短期的には合理的でも、中長期的には危険過ぎる。円の国際化と通貨バ



●ひらかわ ひとし  
東京経済大学経済学部教授。1948年生まれ。明治大学大学院博士課程単位取得。京都大学博士(経済学)。著書に、『NIES:世界システムと開発』(同文館 92年)。共著に、『第四世代工業化の政治経済学』(新評論 98年)、『Japan and Singapore in the World Economy』(Routledge, 1999)。

ケット制は1つの選択肢であり、日本の政策も理解されるだろう。しかし、円のレートが不安定にさらされる中で、どうして東アジアの国々が円をドルに代わる通貨として選択するだろうか。円の国際化は、日本にとっても、他の東アジア諸国にとっても、期待される選択肢でありながら、それができないジレンマにある。

円を国際化させるためにも、日本は東アジアとの有機的な経済関係を一層深める必要があるが、それだけでは十分でない。「ユーロ」の誕生が長い努力を重ねた成果であったように、アジアの発展を支えるためには各

国の政策上の合意と決断が必要であり、それには人々の信頼と一体感が前提となる。多様な歴史、文化、言語を持つアジアが、それでもなお社会の発展に向けて共通の価値を見いだす必要がある。国境を越えた「アジア」というリージョナルなレベルで共通の社会観を共有できるか否かが、歴史の中で問われている。そして、この課題を直視して、アジア通貨基金の構想や「共通通貨」の創造が、決して夢として済まされない課題として追求されるべきだと思う。